

巻頭言

新年には新たな誓いを

鈴木創三¹

土壌物理学学会の学会誌が新たな装丁に変わって、2年目を迎えることになりました。これまでの50年の活動に引き続き、さらに新しい活力が加わった活動が期待されます。会務報告の「開催形式：電子会議」なる言葉や「入退会者名」などをみると、時代の移り変わりとともに、これまでの土壌物理学学会活動が懐かしく思い出されます。

一方、近年は「理科離れ」なる言葉を反映してか、数学や物理学を基幹とする農業土木系の大学でも数物嫌い、数物苦手な学生さんが入ってくるのが問題となっています。そのような背景の中であっても、本学会は土壌物理学を基幹とした研究活動に加えて、他の分野の学会、学会員とも協力、共同して、土壌物理学の基礎・専門知識の啓蒙・教育を行うことも心掛けて頂きたいと思えます。

世の中の移り変わりに応じて、学会も変化してゆくことが大切だと思いますので、事務局、編集委員会、そして学会員諸氏が暖かい友愛と信頼で結ばれ、益々の活躍と発展することを心からお祈り申し上げる次第です。

さて、新年というより新年度の3月の巻頭を飾る言葉に相応しいとよいのですが、著者自身が果たせないながらも常に掲げることが大切と考えている新年の誓いのことばについてのお話を書かせて頂きます。

新年を迎えるというのは、やはり楽しいものです。この暮れから正月にかけての4~5日は、博士過程を過ごした東北大学のある仙台で過ごしたため、往復の新幹線の車内雑誌トランヴェールの12月と1月号を読む機会を得ました。どちらの号でも、巻頭の伊集院静氏のエッセイ「車窓に揺れる記憶」では正月を家族で迎えることの慶びや元旦の朝の澄みわたった青空のことが書かれていました。読み終えると、じんわりと正月気分になり、ウキウキ、ワクワク、ついにはニコニコとうなずきながら、新年の誓いを二つ三つ、わが心根に刻み込んでいました。

きっと、そのような心の高揚が為せる技だったのでしょうか、ごく自然に新年の手帳をリュックから取り出し、1月1日のページに、今誓った言葉を書き始めたわけです。書きながら、ふとリュックの中にあった昨年までの手帳も取り出して昨年の1月1日のページを見ると、どうでしょう。なんと、同じ文句の誓いの言葉が、しかも筆ペンで書かれていました。

考えてみれば、ここ数年、著者はこのような同じ文句の新年の誓いを繰り返してきたような気がします。思わず照れ笑いをしてしまったわけです。

されど、なのです。やはり、毎年誓われながらも、果たせなかった新年の誓い、それを今年も誓うことは決して悪いことではないと思うわけです。逆に、毎年掲げながらも果たせない誓いだからこそ、年が変わるたびに、気持ちも新たに掲げ直すことが大切な気がするわけです。

研究者の世界は、やり始めてみると、若い頃に思っていたほど簡単ではない問題が、それこそ公私ともに次々と出てくるものです。そんな時に、私はわが身の反省を含めながらも、「初志貫徹、心技体ではなく、志体技。先ず、志を立てること、そして体を使って始めること、努力を重ねるうちに技が身についてくること。」なる言葉を我が身に浴びせて、新たな志を以てその繰り返された誓いを掲げるわけです。

もちろん、私のように果たされない誓いを、連綿と何年も掲げるようには学会員諸氏はおられないかとは思いますが、新たな年には、また新たな年度の始まりには、気持ち新たに誓いを掲げることは結構なことではないか、そのように思います。

研究者のピークは35歳前後と言われることがあります。確かに、頭も体もよく動いたのは35歳前後だったかなと思うこともあります。還暦(60歳)なんてずいぶん先のことと思う時代もありましたが、あつという間に時は駆け抜けて行く気がします。振り返れば、そんな誓いを掲げていたから、気がつけば長い研究者生活を送ることが出来た気がします。

別に新年に限る必要はない気もしますが、やはり、新年、新年度には新たな誓いを掲げてはいかがでしょうか。

¹ 東京農工大学大学院共生科学技術研究院